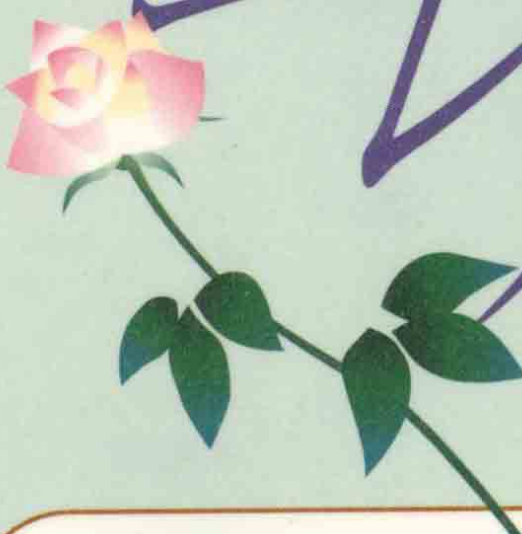


永田町 エレガンス



一年生議員の国会日記



山中燐子

Akiko Yamanaka

小田町エLEGANS

一年生議員の国会日記

山中燐子

Akiko Yamanaka

読売新聞社



著者紹介……山中燐子（やまなか あきこ）

1945年生まれ。小樽市出身。

津田塾大学英文科卒業後、北海道大学助手、静修短期大学講師、北海学園大学人文学部教授（国際文化論）を経て現在衆議院議員。

この間、カナダ連邦政府、米国情報庁、英国ブリティッシュ・カウンシルの招きにより各国で研究活動をする。英国王立国際問題研究所、ドイツ外交協会、ストックホルム環境問題研究所、ロシア科学アカデミー、米国ハーバード大学ライシャワー研究所、ブルッキングス研究所などで研究を重ねる。

永田町エレガンス

一年生議員の国会日記

1997年（平成9年）12月31日 第1刷

著 者 山中燐子

装 丁 重原 隆

編集人 梅田康夫

発行人 伏見 勝

発行所 読売新聞社

〒 100-55 東京都千代田区大手町1-7-1

〒 530 大阪市北区野崎町5-9

〒 802-71 北九州市小倉北区明和町1-11

〒 460-70 名古屋市中区栄町1-17-6

印刷／明和印刷株式会社

製本／寿製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。

Printed in Japan

永田町エLEGANS 一年生議員の国会日記

目次

先生、変わらないでね

7

冷蔵庫買った？

11

バッジのサイズ

14

国会議事堂あれこれ

19

カーペット

23

家具がない！

27

本会議場

30

連絡バス

35

平八会

38

美味しい朝食

41

再会

44

心遣い

47

ウズベクとの縁

51

陳情

55

国会津田会

58

自由に発言していいですよ！

テスト前夜

66

ポケット大臣

74

動議も儀式？

76

野次って四種類？

79

応援団

82

レクチャー

85

落ち着いて！

88

沖縄問題

92

医務室

96

夜桜

99

不思議なご縁

102

参考人質問

106

臓器贈与法案

109

党議拘束

113

そんなに喋って大丈夫？

キャピタルヒルの昼食会

江沢民主席

北京月壇中学校

屋台

陳方安生女史

男女雇用機会均等法改正

やつと家具が……

ワラビーズ

選択できる社会であること

万博誘致

ナゴヤインターナショナルスクールの卒業式

勉強して力をつけなさい！

兼職

涙を飲んで諦めた

新しい英国女性	174
クエスチョンタイム	178
サー・ジエームズ・エベリーと園遊会	181
エレガント・ミセス・サッチャー	187
ニードム家の森	191
懐かしい顔	197
賢夫人たち	199
静御前	202
議員外交	206
スミソニアン・キャッスル・タワーの講演会	210
サッポロ・ファクション	215
ブラウン・バッグ・ランチ	218
キッシンジャー博士	221
ボストン再訪	225
ヘルムズさん、あなたもか！	234

ODA 予算
小沢さんってどんな人？

245 241

メークドラマ —あとかきにかえて—

251

先生、変わらないでね

「先生、差し入れ！」

学生たちが入ってきた。

「ダメダメ、先生はそこに座って指示してくれれば大丈夫だから。自分でやろうとしたら疲れちゃうよ」

「さあさあ、座って、座って！」

当選が決まり、いったん札幌に戻った。あちらこちらに挨拶をしたり、大学の研究室を片付けたりしなくてはならない。

研究室の片付けには、学生たちがアルバイトなどの用事の合間を縫って、入れ替わり立ち替わり、手伝いにきてくれた。研究室の私物の大半が本と書類である。北海学園大学にきてから十年、あふれるほどに積み上がった資料や本を、大学に寄贈するもの、東京に持って行くもの、学生たちに分けるもの、そして処分するものの四つに分類していく。

「えっ、本当？ この本もらっていいの？ すごい！」

九七年卒業の彼らは、私が担当した最後の学生であると同時に、人文学部英米文化科の最初の卒業生でもある。私自身も携わった新学部設置は、まる三年に及ぶ文部省との折衝の末に、九三年、開設に漕ぎ着けた。彼らはその一期生なのだ。

幾晩も徹夜してテキストを作ったこと、イースターやハロウィンなどの伝統行事を実際に講義に導入したりしながら外国人講師たちに各国の文化を紹介してもらったこと、学部の教授陣の三分の一をEFL（外国語としての英語）やESL（第二言語としての英語）の専門家で固め、言語と文化とを組み合わせさせてシステムティックな理解を深めるよう試みたことなど、それまでなかった試みを手探りで進めながら頑張ってきた日々が次々と思い出される。「時間は、重荷を負いつつも背中も曲げずに歩いていく」とはシェイクスピアの『あらし』に出てくる台詞だが、時の経つのは早いものだと、改めて実感する。

思い出話。これからの夢。そんな、ちよつとほろ苦かったり、甘酸っぱかったり、清々しかったり、勇気が湧いてきたりする学生たちの話を聞きながら、作業は順調に進んでいく。それでも、すべての作業が終わったときには、時計は午前五時を回っていた。

「みんなお腹すいたでしょうけれど、この時間に開いているレストランって、この辺りにどこがあるかしら？」

「あるある。ロイヤルホストはここからも近いし、二十四時間営業だよ」

蒼い夜の闇はいつしか融けだして、東の空はもうほの白い。車で十分ほどのファミリーレス

トランに入ると、スピーカーからは鳥のさえずる声、そしてグッドモーニング、グッドモーニングと挨拶のテープが流れている。眠い目をこすりながらテーブルにつき、注文を済ませる。ウエートレスが注文を復唱し、キッチンの方へ下がって、やっと一息。

「みんな、どうもありがとう。よく手伝ってくれたわね。本当に助かったわ」

学生たちは皆につこりと微笑みを返してくれた。と、そのうちの一人が、おもむろに口を開いた。

「ねえ先生、僕らと、約束をしてくれないかな」

「どんな約束？」

「うん、まずね、健康に気をつけること。それから……」

「それから？」

「それから、生き方変えちゃ、ダメだよ、先生」

「僕ら、先生が国会に行っても今と同じ姿勢で頑張っている姿を見たら、ようし、俺たちも頑張ってみようって思えると思うんだ」

「先生は変わらないですよ、私たちに考え方も生き方も教えてくれたんだから、先生が変わるはずないですよ」

「わかったわ。みんなと約束する。政治の世界に入っても、常に前向きに、妥協しないでチャレンジする。あなたがたも、自分の人生を悔いのないように……大きく翔いてね」

三月十日に卒業式があつた。就職して社会に出ていく者もある。ロンドン大学や中部大学など国内外の大学院に進み、研究者としての道を歩み始めたものもある。そうして、皆が、新しい一步を踏み出していった。

学生たちとの薄明の小さな約束は、しかし私にとっては大切な、そして大きな公約である。生き方は変えない。前に向かって、一歩ずつ進むだけだ。

冷蔵庫買った？

第一議員会館二〇一号室が、私のオフィスと決まった。

早速行ってみると、手前に小さなシンクの付いた十二畳ほどの秘書室、ガラス戸で仕切られた奥にはやはり十二畳ほどの議員室という構成で、あまり大きくない作り付けの本棚が一面、その他に、机一つと電話機があった。

というより、机一つと電話機より他に何もなかった。

コピー機も、ファックスも、一から自分で揃えなければならない。のんびりしてはいられない。すぐに国会も始まる。研究室から持ってきた本や書類の山もある。すぐにスライド式の書架を注文し、コピー機やファックスはリースで間に合わせる。それからあと必要なものといえど……コンピュータ。一年待てば支給されるというのだが、国際関係の資料の入手やEメールでのやりとりを考えると、懐具合は苦しいがすぐにも必要だ。

そんなわけで、事務所を起ち上げるのに四苦八苦していたある日、地下廊下のエレベーター

のところで、ばったりと大学の先輩である森山真弓さんにお会いした。

「あら、山中さん、ちょうど良かったわ。連絡しようかなと思っていたのよ。あなた、冷蔵庫買った？」

「いいえ、まだそこまで頭が回りません」

「そう、実はね、私が初当選したときからずっと使っていた冷蔵庫と机があるのよ。ほら、私ね、今度参議院から衆議院に移ったでしょ、それで会館も移って、新しい冷蔵庫も手に入ったものだから、ずっと使っていたのが余ったのよ。まだちゃんと使えるから、捨てるのもったいないし、誰か使ってくれる人いないかしらって考えていたら、山中さんのことが思い浮かんだのよ。どうかしら、あなた、使ってくださいさる？」

「よろしいんですか？」

他党に所属しているにもかかわらず、私のことを思い浮かべこうして親切にしていただけ、なんて有り難いことだろう、と胸が一杯になる。先輩って本当に有り難い。

考えてみれば、森山さんは、環境庁長官、文部大臣、女性で初の官房長官など、大臣職を歴任された方、そうした要職を歴任しての十六年間で、ずうっと同じ小さな冷蔵庫を大事に使っていらしたわけだ。その質素で堅実な姿勢と、要職をこなしてきた実力とに思いをめぐらせると、本当に頭が下がる。ますます尊敬の念が深くなる。

早速、ココア色のプラスチックの天板の付いた薄いベージュの冷蔵庫を、台車に乗せてがらがらと運び込んだ。一緒にいただいた机の上には、コンピュータを据えた。

丁寧に拭いてドアの横に据え付けた古い小さな冷蔵庫は、その日からわがオフィスの宝物となった。

バッジのサイズ

一九九六年十一月七日、初登院の朝。

抜けるように蒼い、コバルトブルーの空。雲一つない、秋晴れ。

国会議事堂の正門前に集合したのが午前八時。集合写真を撮り、新聞各紙のインタビューを受ける。それからいよいよ石段を登り、文字通り登院となる。この登院風景をテレビ局が撮影するのだが、各局それぞれの考え方や構成、構図があるらしく、登っては下りてまた違う並びで上がって、と都合三回も上がり下りをする事となった。

さて、石段を上がり切ると、そこには衆議院の職員が待っていた。ここで議員バッジを付けてくれるのだ。

議員バッジは、テレビなどで見て漠然と思っていたのより小さかった。

裏側に付いている小さな細い安全ピンは、今にも壊れそう。留めにくいらしく、係の職員も付けるのに苦勞している。付けたら取ったりを繰り返すようには出来ていないのだろうか。